

項目反応理論に基づく情報モラルテストの評価と改善

～課題の識別力による試験問題文の考察

石原 一彦*

Evaluation and Improvement of Information Morality Test Based on Item Response Theory

—An Consideration of Examination-sentence Styles by the Discriminating Power—

Kazuhiko ISHIHARA*

1. はじめに

1.1 教育の情報化とモラル

情報モラルの指導は、今日、文部科学省や各地の教育委員会の重要な施策として取り上げられるようになった。情報モラルを指導する機運は徐々に高まりつつあり、指導の方向性を示す資料も増えてきているが、授業の質をチェックし、よりよい授業改善の基となる情報モラルの授業評価に関しては手つかずの状態である。

文部科学省は「新情報教育の手引き」の中で「情報モラルは、情報社会において、適正な活動を行うための基になる考え方と態度であり、日常生活上のモラルに加えて、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報技術の特性と、情報技術の利用によって文化的・社会的なコミュニケーションの範囲や深度などが変化する特性を踏まえて、適正な活動を行うための考え方と態度が含まれる。」と規定している。ここで述べられている「情報社会において適正な活動を行うための基になる考え方と態度」の前提となる「コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報技術の特性」と「情報技術の利用によって文化的・社会的なコミュニケーションの範囲や深度などが変化する特性」

の理解を知識ベースで測定することで、情報モラルの授業評価に関して一つの手がかりが得られないかと考えた。

1.2 研究の背景

情報モラルの授業を評価するためのテストは今までも数多く試みられてきた。しかし、それらの多くは、情報モラルがどのような観点から問われているのか意図が分からないものや、逆に誰にでも答えることができる常識問題のようなもの、また一般的な「善」を問う設問も多く見られた。

このような情報モラルの評価に関する課題の中で、問題文の質をデータで示そうとする試みはほとんどなく、問題文の印象やテストの結果からその質が語られることが多かったように思われる。

1.3 本論の目的

本論では、項目反応理論（IRT）に基づいて情報モラルの評価テストの「識別力」と「困難度」を算出し、データによる問題文の吟味を行うことで、あるべき情報モラルの評価テストの文体を類推しようと試みた。これらの取り組みを通して、情報モラルの評価テストをブラッシュアップし、授業改善につなげたいと考え

* 岐阜聖徳学園大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu Shotoku-Gakuen University)

受付日：2007年11月13日；再受付日：2008年5月12日；採録日：2008年6月28日